

## 807物語

### 真空管

1960年代にアマチュア無線を楽しんでいた人達にとって、忘れられない真空管が「807」・・・通称「ハチマルナナ」です。当時の主力バンドは短波帯の7MHz、14MHz、21MHz で、送信機はほぼ手作り、その最終段のパワーアンプはほとんどが「807」なのです。ダルマの形に似ていたので通称ダルマ管とも呼ばれました。内部が真空なガラス管の中に金属構造が組み立てられており、電源を入れると中心部のヒーターが赤熱して何とも言えないわくわく感がありました。

札幌時計台仲通りのお阪屋は今ではオーディオ専門店ですが、かつてはアマチュア向けに抵抗やコンデンサーなどの電子部品も販売していました。週末には多くのマニアが列をなし、そのショーケースの中で美しく輝いていた「807」。小遣いを貯め、やっと買って帰った日が懐かしいです。

当時のラジオ少年のこんな気持ちを描いて秀逸なのが柴田翔「ロクタル管の話」です。1964年芥川賞の大ベストセラー「されどわれらが日々」に併載されている短編ですが、受賞作を読んだというひとの誰に話しても、悲しいかなこの珠玉の一編に対しては「そんな小説書いていたかなあ」と言われてきました。ちなみに、ロクタル管も独特な形状をもつ真空管の一種です。

#### (AI-Additional Information1)

一部のオーディオマニアを除いて、真空管を見たことがない人たちが多くなっているのは仕方がないとは思いますが、テレビのブラウン管というのを知らない人たちも多く、驚いてしまいます。数世代前のパソコンはなぜ奥行きがあるのか、それはディスプレイがブラウン管(CRT=Cathode Ray Tube)だからなのです！

どちらもヒーターで電極を加熱して陰極線(電子)を飛ばし、陽極までの途中を制御することでアンプになったり、蛍光面を光らせて映像が見えたりしているのです。

#### (AI2)

1960年代の周波数の単位は c/s(サイクル毎秒)であって、Hz が取って代わったのは日本では1972年、札幌オリンピックが終わった夏のことです。

もっともアマチュア無線の世界では以前も現在も周波数よりは波長で呼ぶことが多く、7MHz は40m、14MHz は20m、21MHz は15m と表現するので、単位の変更は気にならないようです。

## 札幌テクノパーク

1980年代になると NEC の PC8800 シリーズから PC9800 シリーズと続くパーソナルコンピューターの一大ブームが起こります。当初は個人のホビータク要素が強かったのですが、徐々にビジネスへの活用が始まり、これを支える担い手として、大学生のまま、あるいは大手企業をスピンアウトした若者たちが会社を立ち上げます。それらはベンチャー企業と呼ばれました。北海道には多くの理工系大学がありますが、彼らを受け入れる企業群が少ないため、卒業生のほとんどが道外に転出してきました。ところが、パーソナルコンピューターを活用したビジネスが可能なら、就職を道外に求めなくとも良いのではと考えた若者たちが札幌を中心に起業を始めました。そこに目をつけた札幌市は、このような若者を支援し、新たに発生しつつある業態を育成して、さらなる受け皿にしようと考えました。元々、製造業比率の低い産業構造のなか、付加価値の高い産業の育成が欠かせないとの思いが強かった札幌市は、製造業とサービス業を結びつける「情報産業を創出する」という目的を持ったのです。

1985年、札幌テクノパークの造成と札幌市エレクトロニクスセンターの建築が開始されました。同年は電電公社が民営化され NTT が発足した年でもあります。その NTT が初の携帯電話を発売したのもこの年です。「ショルダーフォン」と呼ばれ携帯というよりは可搬型無線電話器でした。テクノパークへの立地予定企業の某社長が「携帯」して現れ、驚いたものです。

翌1986年の12月に竣工します。道外からの企業を誘致し、札幌市内で起業していたソフトウェアハウスやシステムハウスも集約した企業団地が出現したのです。新たな街として町名整備も実施され「下野幌テクノパーク」の1丁目と2丁目が生れました。これは札幌市がカタカナ表記の町名を採用した第一号です。

同時に電話局番も新たに附番され、それが何と「807」なのです。しかもエレクトロニクスセンターは「807-6000」・・・「ハチマルナナのムセン」ではないですか。白石区、厚別区の局番は8××が多くつけられていたので、これは絶対に NTT の中に1960年代のアマチュア無線オタクがいて、ここぞとばかりに附番したのだらうと思いました。

しかし、この発見に対する周りの反応は薄く、ほぼ無視、またもや「ロクタル管の話」と同じことかと悔しい毎日をおくっていましたが、ここで大逆転ホームランが飛び出すのです。

当時は行事があると記念品としてテレホンカードを作ることが流行していました。テクノパーク開設とそれに伴う新しい電話交換機の稼働記念として何と驚きのカードが発行されたのです。



通信衛星が浮かぶ宇宙は一皮むくと真空管という意味深なデザインですね。最も左側にあるのが真空管、「807」という表示がはっきりと確認できます。やはりいたのですね同志が。思い出がある割にはしっかり利用したので使用済みパンチ穴が開いています。

こうして「807」は半導体の時代に札幌テクノパークの局番号として再来し、今やオーディオマニアのアナログ機器ブームにのって優しい音を生み出すオーディオアンプとしても復活する時代となりました。

(AI3)

札幌市ではこれまで町名としてカタカナを使用したことがなく、如何なものかといった議論もありましたが、旧来からこの地域を表す「下野幌」を冠することと、先端的な場所を象徴するという合体案として採用されました。その後、カタカナ町名には白石区の「流通センター」と東区の「モエレ沼公園」が加わりました。

道外企業の方には最初「シモノッポロ」とは読めなかったようです。でも、外国人にとってはP音とR音を同時に含む地名は日本的ではない響きのようで、「サッポロ」同様好評です。「ロップンギ」みたいに。

(AI4)

テレホンカードは1982年、公衆電話用プリペイドカードとして誕生しました。当時はノベルティとしていろいろな機会に発行配布され、アイドル系の絵柄カードはいまだに高値取引されているようです。

公衆電話での遠距離通話では、投入した10円玉が次々と落下する音で落ち着かなかったものですが、テレカになって少し余裕をもって話すことができるようになりました。

いまや公衆電話自体を見つけるのが難しいぐらいです。スマホ時代の子供たちにはコインやカードを入れてダイヤルを回すなどという行為は、ブラウン管テレビのチャンネルを回すことと伴に想像を超えた行為なのですね。

(AI5)

アマチュア無線を楽しんでいた頃、我が家の電話番号は、××-2807でした。